

# How come S構文の変遷と疑問詞 how come への再分析 (1560-2009)

金原 いれいね

## 1. はじめに

日常会話では、Why does Franny want to see me? と同じような意味で、How come Franny wants to see me? といた言い方を耳にする。ジーニアス英和辞典（第四版）で how come の項目を開いてみると、「why …? より口語的」、「すでに生じた（現在生じている）ことについての理由を尋ねる言い方」、「How did you come to …? の意の決まり文句；古い英語の名残り」といった説明が並ぶ。理由をたずねる疑問表現であるという点では why と同じであるが、口語性が高いことや、すでに事実となったことからの理由をたずねる目的に限定されていることなど、全く同じというわけではない。また、それ以上分離不可能な要素として用いられ、疑問文にもかかわらず平叙文の語順をとるのも変則的である。いうまでもなく come は本来、動詞である。それがどういった歴史を経て疑問詞の一部となったのだろうか。動詞と疑問詞が組み合わされて、新たに一つの文法的まとまりを形成することがありふれた言語変化とはいえないだけに、こうした変化がどのように起きたのかという疑問が湧く。

How came the seal to be broken? のように、how を文頭にとり、動詞 come と主語の間で倒置が起きている構文が、現在用いられる疑問詞 how come の前駆的構文であると考えられる。金原（2019）では、これを How come S 構文と呼び、資料時期の異なる三つの史的コーパス、Penn-Helsinki Parsed Corpora of Historical English (PPC)、Corpus of English Dialogues 1560-1760 (CED)、Old Bailey Corpus Online 1720-1913 (OBC) から得られた資料をもとに、そうした用例が増加していく様子を辿った。それは、構文が柔軟性を失いながらも慣用表現として定型化していった過程であり、化石化と呼ぶのに相応しい。How come S 構文は本来、動詞第二位構文 (V2) の一種 (How VS 構文) であった。しかし、古英語、中英語期に一般的であったこうした語順は、13世紀以降、イギリス南部から拡大した迂言的 do の台頭を受けて衰退するにつれ、徐々に現代英語に特徴的な How do SV の語順に置き換えられていった。しかしながら、say や know といった動詞を含む How VS 構文が徐々に数を減らし、次第に疑問文の標準的語順としての座を譲り渡すのと相反するように、come を用いた How come S 構文だけは17世紀半ばから増加し始めた。共

起する動詞の多様性が失われ、構文としての汎用性が低下するなか、How VS 構文は How come S 構文としてある意味孤立していくことによって日常表現に定着していったわけである。ただし、大きな変化にあらがって生き延びたかに見えた How come S 構文も現代まで生き永らえていないのは周知の事実である。

代わりに我々が耳にすることができる疑問詞 how come は、さらに文法化が進み、come が動詞としての機能を失うことによって新たに生まれたものである。では、この疑問詞はいつどこで誕生したのか。上記の三つのイギリス英語コーパスでは、18世紀の裁判記録に僅か三例確認されただけであった(金原2019)。その母体ともいえる How come S 構文は、18世紀の初めに頻度のピークを迎えた後、徐々にその数を減らし、19世紀末にはほぼ用いられなくなった。これらを考え合わせると、疑問詞の用法は当時のイギリスにおいてその萌芽が認められたものの、市民権を得るには至らなかったといえる。

本稿ではこうした点を踏まえ、疑問詞の用法が新大陸アメリカにおいて誕生した可能性を、1810年から2009年までの資料を取めた Corpus of Historical American English (COHA) によって検証することを第一の目的とする。この疑問詞は、現在では広くイギリスとアメリカの両国で使用されているが(金原2017)、OED に記載されている初出が19世紀に出版されたアメリカの方言辞典 Dictionary of Americanisms (1848) であることからみても、海を渡ったアメリカにおいて新しい用法が生まれた可能性は大きい。本稿の第二の目的は、イギリス英語の資料をもとに How come S 構文が辿った変化の様相をより丁寧に見ていくことである。一口に How come S 構文といっても S の後に続く述部要素は一つではない。述部要素の種類ごとに頻度を観察することによって、そうしたヴァリエーションを含んだ総体として How come S 構文が辿った言語変化の様相をより詳細に明らかにしていきたい。新たな疑問詞が生まれた時期、あるいはそれに先立つ時期にどういった述部要素を伴って使用されていたか知ることは、疑問詞の誕生の謎を紐解くにあたっても重要な示唆を与えてくれるに違いない。

本稿の流れは次のとおりである。まず、2節で How come S 構文について概要を述べた後、時間の流れに沿って、3節と4節ではイギリス英語コーパスである CED と OBC を、5節ではアメリカ英語コーパスである COHA を対象に、述部要素ごとの変化を観察する。さらに、5節では、How come S 構文から疑問詞への変化をいくつかの文法的、形式的特徴に分けて整理したうえで、新しい疑問詞の登場と共に増加した埋め込み文の用法についても考察を加える。

## 2. How come S 構文

一般に、疑問詞 how come の語源をめぐっては、形式主語を用いた構文が直接の起源であると考えられがちである。(1) にあげたのは16世紀から17世紀の作品の一部であるが、主語の位置に形式主語 it が現れ、that 以下に内容節が続く。こうした構文は、時に動詞 pass の不定形を伴って

How comes it to pass that SV の形式をとることもあった。(1) はさしずめ to pass が省略されたものと見ることができる。他にも、How comes it to pass SV のように補文標識 that が省略された例も多い。さらに、to pass と that の両方が省略された How comes it SV といったものもあるが、これは、形式主語をとる一連の用法のなかでも最も簡潔なものである。

(1)

- a. In the name of God **How comes** it then that thou art call'd a King? (Shakespeare, William, *The Life and Death of King John* 1595 from OED)
- b. **How comes** it then, that in so near decay We deadly sleep in deep security? (Fletcher, Phineas, *The Purple Island, or the Isle of Man* 1633 from OED)

しかしながら、こうした用例がすべてだったかという点、断じてそうではなく、これ以外にも how come を含む様々な構文が使用されていた(金原2017)。以下は COHA で得られた19世紀の用例である。ここでは動詞 come がとる述部要素の種類によっていくつかのタイプに分類し、それぞれ「Sのみ」、「S to 不定詞」、「it (to pass) (that) SV」、「S 分詞形」、「S 形容詞」、「S 前置詞句」、「S (t) here」とした。いずれも、疑問副詞 how が文頭(もしくは節の先頭)に現れ、動詞 come と主語が倒置される。本稿で「How come S 構文」と総称して呼ぶのは、特定の語彙要素と倒置語順を共通項とするこれら複数の構文である。なお、「it (to pass) (that) SV」としたのは(1)で紹介した形式主語を含む文である。形式主語 it の後に to 不定詞句が続くため、「S to 不定詞」に含めることもできるが、形式主語という特殊性からここではあえて区別して扱うこととする。

(2) How come S構文の種類

#### Sのみ

But pray tell me, **how comes** this windfall? (FIC 1836 Tucker, *George Balcombe, Volume 2*)

#### S to 不定詞

But hey! **how came** the seal to be broken? (FIC 1811 White, *The Poor Lodger*)

#### it (to pass) (that) SV

If he does so many charitable actions, **how comes** it, Robert, that he did not replace your nag? (FIC 1811 Hutton, *Fashionable Follies*)

#### S分詞形

**How came** her journey put off? (FIC 1879 Farquhar, *The Recruiting Officer*)

#### S形容詞

"**How came** you asleep there?" asked Farmer Harrowby. (FIC 1856 Durivage, *The Three Brides, Love in a Cottage, and Other Tales*)

### S前置詞句

**How comes** my brother in this sad affray? (FIC 1811 White, *Modern Honor*)

### S (t) here

Where has he been since then, and **how comes** he here? (FIC 1860 Cummins, *El Fureidis*)

ここにあげられた述部要素は、現代英語においても come と共起することができる。たとえば、The sergeant came to know the truth. The tie came undone. The bag came open. Please come to the meeting. She'll come here in a minute. といったように、下線で示した部分はどれも come の下位範疇である。また、注目すべきは、動詞が came, comes といった変化形をとっている点である。述部要素の種類と多様性、そして動詞の変化形といった側面において、come が本動詞としての文法的機能を維持していることは疑いようのない事実である。裏を返せば、述部要素がヴァリエーション豊かであるのは、come が持つ自立的機能から当然予想されるものであり、ここで How come S 構文と呼んだ多様な構文群は、V2に由来する倒置語順と動詞 come の用法という二つの特徴を軸として緩やかに結びつけられていたといえるだろう。

疑問詞 how come の直接の起源に話を戻すと、How comes it (to pass) (that) SV? がその候補と目されやすいのには、この構文の形式的特徴が関係しているようである。というのも、疑問詞の後に SV をとるのが疑問詞 how come の特徴であるが、この構文だけが新しい疑問詞と同様に、SV、つまり主語と定動詞のまとまりを含むからである。誤解のないように述べると、主語と定動詞 (SV) はあくまで主節に従属する補文にすぎない。しかし、主節と補文の違いをあえて問わないとすれば、こうした語順と一致するのは、How come S 構文のなかでは唯一、形式主語をとる構文だけなのである。したがって、もともとさしたる意味的実質を伴わない形式主語 it と補文標識 that が、長い歴史の中で次第に省略されるようになったと考えるだけで、新しい疑問詞の用法を導き出すことができる。Zwicky & Zwicky (1971) は、変形規則の枠組みからこの疑問詞の特殊性を扱った最初の研究であるが、How has it come about that she has read the book? という基底の文が大幅に短縮されることによって疑問詞 how come の文が生み出されるとしている。もちろんこれは歴史的变化について論じたものではないし、その証拠に、基底文の主節が現代英語の疑問文語順になっているのだが、語の起源に思いを馳せる一般の人々と同様、言語学者にとっても省略による説明は同じく魅力的に映るようである。しかし、こうした表面的な形式上の類似にもとづいて疑問詞 how come の起源を推し量るのにはいささか無理がある。現代英語でも頻繁に起きる補文標識の省略はさておき、形式主語までもがそろって省略されることがないだけに尚更であろう。

### 3. CED: イギリス1560-1760

CEDとは、アップサラ大学のMerja Kytö教授とランカスター大学のJanathan Culpeper教授が、戯曲(コメディ) (play-texts, comedies)、散文フィクション (prose fiction)、指南書 (didactic works)、裁判記録 (trials)、証人供述調書 (witness depositions) といった資料から、地の文を除く会話部分のみを集めて編纂した約120万語の近代英語口語コーパスである。

図1はCEDにおけるHow come S構文の一万語あたりの頻度である。ここではCEDに従って40年を一つの区切りとし、1期(1560-1599)、2期(1600-1639)、3期(1640-1679)、4期(1680-1719)、5期(1720-1760)とした。なお、用例の検索にはランカスター大学のAndrew Hardie教授が管理するCQP (Corpus Query Processor)<sup>(2)</sup>を利用し、howの後に動詞が続くものを抽出した後でcomeを含む用例に絞り込んだ<sup>(3)</sup>。また目視によってその直後に主語が続くかどうか確認した。

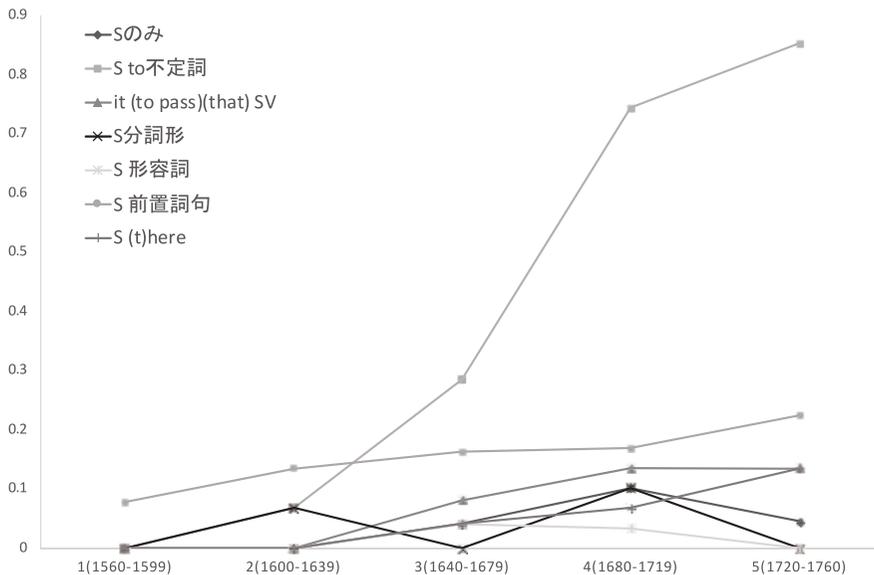


図1 CEDにおけるHow come S構文(一万語あたりの頻度)

この図から見てとれるのは、16世紀後半から17世紀前半にかけてHow come S構文の用例が全般的に少ない点である。1期と2期を合わせても(3)にあげた5件の用例しか得られなかった。うち3件は前置詞句をともなう用例で、(3ab)は「～を(偶然)に手に入れる」という意味の句動詞come byの倒置、(3c)は場所を表す。

(3)

- a. **How came** you by this? (Comedy 1595 Warner, *Menaecmi*)
- b. Why, hast thou it, Numpes? good Numpes, **how come** you by it? (Drama 1631 Jonson, *Bartholmew Fayre*)
- c. I am not dead, for I haue sence and life, **how come** I then in this Coffin buried? (Drama 1602 Heywood, *How a Man May Chuse*)
- d. But tell mee, **how came** thy white coate besmeared with bloud, and thy face so bescratcht? (Fiction 1619 [1596-97?] Deloney, *Jack of Newberie*)
- e. But **how came** you, Mistris (原文 Mistis) Welborne, to be his Ward? or haue relation to him, at first? (Drama 1631 Jonson, *Bartholmew Fayre*)

もしかすると、句動詞の倒置といった用例を一律に How come S 構文に含めて扱うことに抵抗をおぼえる向きもあるかもしれない。構文を仮に、話者の意識において凝集性を持つヴァリエーションの総体と考えるならば、これらの用例がそうしたまとまりとして捉えられていたかは確かに判然としない。しかし、書かれた資料からは、そうした話者の意識について読み取るのが難しいのも現実である。本稿ではあえてそうした問題には立ち入らず、あくまでも文法形式の一致に基づいて用例を特定することとする。

ここで、少し脇道に逸れるが、CED の資料に先立つ中英語期の用例を PPC から見てみたい。how を文頭にとる V2 は中英語期には say、think、believe、hear といった動詞をとることが多かった一方、come と一緒に用いられることは稀であった。以下はそうした比較的珍しい用例といえるだろう。(4a) は復活祭の説教の一節であるが、純潔や慈愛といった精神的概念を装いになぞらえ、「相応しい身なりをせずになぜここへやってきたのか」と述べる箇所で、come と一緒に使用されるのは場所副詞 *ider* である。(4b) でも、同じく場所副詞 *hidur* が用いられている。こちらは、ボートを使わずに向こう岸に渡ったイエスにむかって、民衆が「どうやってここへ来たのですか」とたずねるヨハネによる福音書からの一節である。最後に、(4c) は、神の国を王の息子の結婚式にたとえた説教の一節で、結婚式に集まった人々に対して結婚式の贈り物もなしになぜここ (*in here -otur hidur-*)、すなわち、参列者のいる場所 (*amonge is mene*) へやって来たのかたずねている。これらに共通するのは、come が移動の到達点として場所副詞および前置詞句をとることである。CED1期、2期において前置詞句を伴う構文が多いのは、こうした傾向の名残りといっているかもしれない。

(4)

- a. **hwu come** tu *ider* in mid *unbicumeliche weden*.  
how camest thou in hither with uncomely garment

'How come you here in uncomely garments?' (cmtrinit-mx1)

- b. thei seiden to hym, Rabi, **hou come** thou hidur?

they said to him, Rabi, how come you here?

'They said to him, Rabi, how come you here?' (cmntest-m3)

- c. **how comeste** tou in here -otur hidur- and haste no leueree of my weddynggus? (…)

**How commes** tou tan amonge is mene?

how come you in here -other here- and have no clothing of my wedding? how come you then among his men?

'How come you in here -or here- and have no clothing of my wedding? (…)' How come you then among his men?' (cmroyal-m34)

ただし、場所や移動といった空間表現をとりやすかったのは、構文の頻度が低かった時期までである。CED 3期に入ったあたりからは to 不定詞が飛躍的に増え始める (図1)。(5a (=3e)) は CED におけるそうした構文の初出であり、(5b-e) は3期から5期にかけて得られた用例である。

(5)

- a. (=3e) But **how came** you, Mistis Welborne, to be his Ward? or haue relation to him, at first? (Drama 1631 Jonson, *Bartholmew Fayre*)
- b. **How came** he to shew you the Commissions? (Trial 1678 Edward Coleman)
- c. **How comes** this Fool to stumble on this frightful Probability? (Comedy 1719 Killigrew, *Chit-Chat*)
- d. I pray you good Mr. Stepwell **how comes** he to have such an urgent occasion for this Sum or be obliged to a Mortgage? (Fiction 1692 Oldis, *The Female Gallant or, the Wife's the Cuckold*)
- e. **How came** you to have that mighty Dependance on Dr. Murphey? (Trial 1722 Christopher Layer)

古英語期には原形不定詞が数の上で優勢だったため、to 不定詞は動作の目的を表すのに限定して用いられた。ところが、原形不定詞の代わりに用いられるようになったこともあって、初期近代英語期には to 不定詞が次第にその存在感を増していた。また、動詞不定詞にはかつて格変化があり、主格 (対格) は -(i) an、与格は -enne 語尾をとり、前置詞 to は与格不定詞をとったが、動詞の屈折語尾が失われるにいたって、これに代わる形式が必要とされたため、中英語期には新たに for to が目的を表す用法以外にも用いられるようになった。かくして、to 不定詞の数は大幅に増加し、原形不定詞をとる動詞はごく一部にとどまった。また、古英語期には目的や意図を表す

動詞は、that に相当する *poet* に導かれた節をとるのが一般的であったのに対して、中英語期になると、代わりに *to* 不定詞句をとるようになったこともこうした変化に拍車をかけた (Manabe 1989, Los 1998)。

*to* 不定詞が使用範囲を拡大していくこうした大きな流れのなかで、特に本稿との関連で重要と思われるのは、中英語期に (for) NP *to* V のように *to* 不定詞句の直前に *for* を伴う意味的な主語が現れたことである。Fischer ら (2000: 214) は *for* が名詞の格を示す前置詞としての機能を超えて、次第に補文標識として再分析されていった可能性に触れ、前置詞 *for* を伴うことなく、名詞句と *to* 不定詞が補文としてのまとまりを形成する用例が中英語後期に現れるきっかけを作ったとしている。

(6) (Fischer et al. 2000: 217から)

But a man to lyve pesibly with harde & overthwarte men … is a gret grace & a commendable and a manly dede. (*Imit. Chr.* 2.3.14)

'But for a man to live peacefully with hard and hostile men … is an act of grace and a commendable and manly deed.'

S *to* 不定詞構文でも動詞としての実質的意味を担うのは *come* よりもむしろ *to* 不定詞句であることを思い起こしてほしい。(5a (=3e)) にあげた *you, Mistis Welborne, to be his Ward* が節に相当する意味を担っていると捉えれば、(6) の補文 *a man to lyve pesibly with harde & overthwarte men* との類似性は明らかである。目的や意図を表す動詞が *to* 不定詞をとり始めたこと、また、名詞と *to* 不定詞のまとまりが補文として使用されるようになったという変化が、17世紀に始まった *How come* S 構文における *to* 不定詞増加の引き金になった可能性は大きい。

一方で、こうした時期の用法について、主語が *come* から切り離される代わりに *to* 不定詞と補文を形成した、といった解釈が厳密には成り立たないのも事実である。文法的にみれば、(5) の主語 *you, Mistis Welborne,* に対応する動詞は *to* 不定詞ではなく、依然として主語と数の一致を示している *come* であることに変わりないからである。仮に、中英語期に (6) のような文からの類推が S *to* 不定詞構文に働いていたとすれば、こうした文法的な側面とは別に、主語が不定詞以下と意味的により強固に結びつくことで、*come* から切り離される素地がこの時点からすでに準備されていたと考えるのも、あながち的外れではないのかもしれない。

続いて、意味的観点から CED で得られた *How come* S 構文の変化について整理してみたい。まず、中英語期から CED2期にかけて見つかったのは、主に「移動」を表す S 前置詞句や場所副詞の S (t) *here* を含む用例であったのは先にも述べたとおりである。こうした用例では、副詞的要素によって移動の到達点が表示されることによって、*come* が空間的表現の一部となっており、*how* は到達点、移動といった意味要素と共起することで、(7) のように移動の理由や方法を問う役割

を果たした。

(7) L. C. J.: **how came** you there?

J.: I carried Notes backwards and forwards. (Trial 1680 Elizabeth Cellier)

How come S構文の頻度が増したCED3期以降になると、S to不定詞がより一般的になったことは先にも述べたとおりであるが、こうした変化は、とりもおさずそうした構文が主として担う意味にも変化をもたらした。それまでは空間的移動が中心であったHow come S構文において、新たに増加したS to不定詞構文が表したのは、状態変化の理由および、状態変化を含まない純粋な理由であった。(8a)は夫が妻を重婚の罪で起訴した事件の裁判記録である。弟の結婚相手が実は既婚者であったことをどうやって知るに至ったのか、裁判官がチャールトン氏にたずねる場面だが、cameは婚姻歴に関する情報がない状態からある状態に変化したことを表している。記録係から送られてきた手紙を通じて知ったというチャールトン氏の返答からもわかるように、ここでhowが聞き出しているのは、もちろん移動の理由や方法ではなく、チャールトン氏の知識に関わる状態変化のきっかけとなった出来事である。

(8)

a. Court: Mr. Charlton, **how came** you to understand she was married formerly?

Charlton (elder): I received a Letter from the Recorder of Canterbury to that purpose.

(Trial 1663 Mary Moders)

b. (=3d) But tell mee, **how came** thy white coate besmeared with bloud, and thy face so bescratcht? (Fiction 1619 [1596-97?] Deloney, *Lack of Newberie*)

(8b)はS to不定詞と並んで状態変化を表すS分詞形の用例である。besmeared, bescratchtと一緒に用いられることによって、cameは上着と顔に起きた変化、つまり白い上着が血で汚れ、顔が傷を負うという変化を表し、howはそのそうした状態変化の理由をたずねている。空間における移動という具体性の高い事象と、状態変化という抽象の高い事象を一つの動詞が表すのはなにも驚くべきことではなく、現代英語にも見られる多義性である(The shoelaces come undone.)。

How come S構文が意味的に疑問詞how comeの用法に最も近づくとと思われるのは、(9)にあげた純粋に理由を問う用例においてである。ここでは「それは六月五日木曜日でした」という証言に対して、「なぜその日は詳細に覚えているのか」と裁判官が疑問を投げかけている。過去の記憶は曖昧になりやすいのが人の常であるにもかかわらず、なぜその日に限って確信が持てるのか問いたず質問の性質上、comeが移動および状態変化を意味するとは考えにくい。

(9)

a. G. Baker: It was on Thursday, the Fifth of June.

Council: **how came** you to be so very particular in that Day, you see Mr. Greenwood often, can you remember any other Day of the Month that you were with him, or dined with him. (Trial 1740 Greenwood)

b. But, pray, Madam, **how came** the Poets and Philosophers that labour'd so much in hunting after Pleasure, to place it at last in a Country Life? (Comedy 1707 Farquhar, *The Beaux Stratagem*)

移動や状態変化の意味が欠落しているのは(9b)も同様である。こちらは、田舎の生活に退屈し、都会暮らしに戻りたいと願う義理の姉に向かって、妹が反論する台詞である。仮に came が状態変化を表すとすれば、以前はさほど関心を寄せなかった田舎の生活に対して、詩人や哲学者達が次第に価値を見出すようになった、という意味になるだろうか。しかし、この文の目的は、喜びを追い求める人種として詩人や哲学者といった人たちを提示し、そうした人達が田舎の生活を愛おしんでいると述べることで、田舎の再評価を促すことである。こうした文脈からいっても、ここでは詩人や哲学者の興味関心の対象が変化したという意味が意図されていないのは明らかである。(9)では come が動詞としての機能を維持しているものの、移動、状態変化といった語彙的意味は希薄化している。動詞としての意味的実質を失っている点で、疑問詞 how come の用法に近づきつつある用例と言っていいたいだろう。

以上のように、How come S 構文は、how および come の意味に基づき、「移動(の方法・理由)」、「状態変化(の理由)」、「理由」の三つに分類することができた。また、そうした意味の違いは述部要素の種類と密接に関係づけられるため、各構文の頻度の変化は How come S 構文が典型的に表す意味にも変化を引き起こした。頻度の違いはあるものの、各構文は18世紀まで併存したことからいっても(図1)、こうした3つの意味のうちどれかが完全に消滅したというわけではない。しかし、意味の具体/抽象度において異なる表現の中で、S to 不定詞構文が最も頻度の高い用法となることによって How come S 構文は典型的に状態変化および理由を示すための表現へと重心を移していったといえるだろう。

#### 4. OBC: イギリス1720-1913

次に、OBC の資料に沿って1720年代から20世紀初めまでの変化について見ていく。OBC とは、ギーセン大学の Magnus Huber 教授らがロンドンのオールドベイリーにある中央刑事裁判所 (Central Criminal Court) で行われた法廷記録から会話部分を抜き出し、言語分析用にタグ付けした通時的コーパスである (Huber et al. 2012)。1720年から1913年までの裁判記録からなり、

総発話数は約31万8,000、総語数は約1,400万語にのぼる。1679年にはロンドン市長と裁判官が承認したものに印刷許可が下りたこと、さらにはこうした記録が法廷で交わされたやり取りの忠実、公平、真正なナラティブであることが1778年に法的に規定されたことから (Huber 2007)、当時の口語的特徴を伝える再現性の高い貴重な資料となっている。なお、データから用例を抽出するにはギーセン大学の OBC vers.1.0<sup>(4)</sup>を利用し、CED 同様、how の後ろに語彙動詞が後続するものを指定してから come に用例を絞った<sup>(5)</sup>。また、必要に応じて前後の文章を参照し文脈の把握に努めた。

図2はそうして得られた構文の頻度である<sup>(6)</sup>。OBC には特に時代の区分は設けられていないが、ここでは CED にならい40年を一区切りとした(1期1720-1759、2期1760-1799、3期1800-1839、4期1840-1879、5期1880-1913)。一万語あたりの頻度を比較してわかるとおり、OBC では CED の約二倍の頻度で How come S 構文が用いられている。裁判記録や証人供述調書で基調となるのは、質問とそれに対する回答とで構成される会話であるが、そうしたやり取りでは他の口語的ジャンルと比べても質問の頻度が目立って高くなることによると思われる。

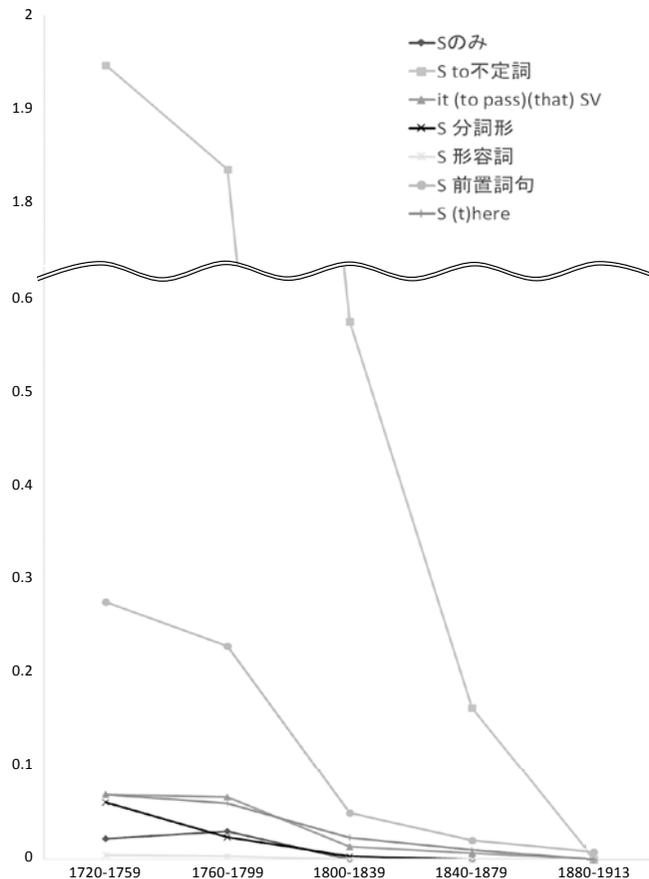


図2 OBCにおけるHow come S構文(一万語あたりの頻度)

OBCにおいて最も多くの用例が得られたのは1期から2期にかけてである。なかでも圧倒的に高い割合を占めるのはS to不定詞で、1期で得られた全用例数568件のうち実に452件(80%)にのぼる。S前置詞句が64件で二番目に多いがその差は際立って大きい。OBC 1期と時期的にはほぼ重なるCEDの5期(1720-1760)でも、to不定詞を含む用例は全72件中49件(53%)であったことを考えると、裁判記録や証人供述書では特にそうした傾向が顕著だったことがわかる。以下の用例で、末尾に括弧書きで付したのは裁判番号(trial ID)であるが、tに続く数字は裁判の開始日、ハイフンの後の数字は通し番号である。

(10)

- a. he said, Lord, Madam, I'm frightened out of my Wits, **how came** you to leave your Bureau unlock'd? (t17320419-17)
- b. When the prisoner came for his shirt, **how came** it not to be delivered to him? (t17610506-23)
- c. **How came** you to make your appearance here as a witness for the prisoner? (t18030914-81)
- d. **How came** you, a person of your mature age, and apparent care and caution, to sign a deed when you did not know what it contained? (t18430130-814)
- e. we had a few words, and I said, "Mr. Taylor, **how came** you to let May get hold of my goods?" (t18570615-723)

しかし、18世紀前半にピークを迎えたS to不定詞構文もその後、急激な減少傾向に転じる。それまで、一万語あたりの頻度にして2語に近かった用例数は、世紀の変わり目をまたいで、実に三分の一以下まで減少し、20世紀に入る頃にはほぼ消滅する。S to不定詞に次いで多くの用例が得られたのはS前置詞句であったが、こちらも同じく衰退し、イギリス英語におけるHow come S構文の用例は、すべての述部要素の種類に渡ってほぼ姿を消した。

## 5. COHA: アメリカ1810-2009

次に、大西洋を渡り、アメリカにおける変化をCOHAの資料に沿って見ていきたい。COHAはブリガム・ヤング大学のMark Davies教授の作成による約4億語の歴史コーパスで、1810年から2009年までに出版されたフィクション(fiction)、一般雑誌(popular magazines)、新聞(newspaper)、ノンフィクション(non-fiction books)からなる。各ジャンルの割合は年代ごとに異なるが、フィクションはすべての年代において約半数を占める。

具体的な検討に移る前に一言、CED、OBC、COHAの性格について触れておく必要があるだろ

う。これらはいずれも各時代の総語数が均等になるよう配慮された時系列コーパスである点では一致している。しかし、CEDとOBCがイギリス英語、COHAがアメリカ英語であるという地理的の違いに加えて、二つのイギリス英語コーパスが口語コーパスであるのに対して、COHAは書き言葉として得られる資料を広範に集めた汎用目的コーパスであるという違いがある。口語コーパスとは、話し言葉に用いられる言語表現の分析のために編纂されたコーパスであり、話し言葉に最も近いと思われる資料に特化している。録音記録装置が存在しない時代の言語資料であるCEDやOBCが書き言葉をベースとしていることはいうまでもないが、たとえば、CEDでは戯曲、散文、フィクション、指南書、裁判記録、証人供述書に含まれる会話部分のみを採録することによって、話し言葉の特徴の強い文だけが集められている。フィクションの場合「会話」はあくまで作者の創作による点で二次的であることは否定できない。しかし、会話に真実味を持たせるため作家は当時話し言葉で用いられていた語彙や文体を積極的に使用したに違いないという前提のもとに、こうした口語コーパスが編纂されるに至っている。CEDが創作された話し言葉であるのに対して、OBCは話し言葉そのものの記録である。法廷というある種特殊な場とはいえ、当時の口語的使用を反映しているとみて間違いなさだろう。一方、COHAは汎用目的コーパスである。特定の言語使用を念頭に置かないため、小説から資料をとる場合であっても会話と地の文は区別されない。ダイアログを基本とする口語コーパスと比較した場合、新聞、雑誌の記事といったモノログや小説の地の文を多く含むCOHAでは質問表現の頻度は必然的に低くならざるをえない。

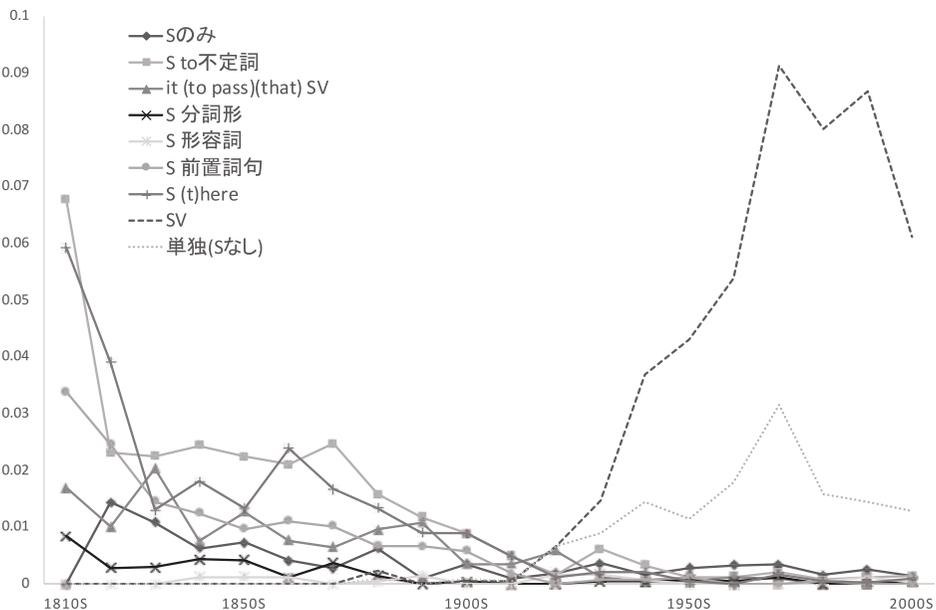


図3 COHAにおけるHow come S構文と疑問詞how come構文(一万語あたりの頻度)

図3はCOHAにおけるHow come S構文および疑問詞how come構文の推移である<sup>(7)</sup>。COHAにおけるHow come S構文の頻度はCEDやOBCと比較して全般的に低いが、それは、こうした表現がアメリカにおいて一般的でなかったとか、根付かなかったというよりもむしろ、汎用目的コーパスというCOHAの資料的性格による影響が大きいだろう。

図3の特徴として、初めに目を引くのは、1920年代前後に起きた用法の転換である。それまでは、How come S構文と総称的に呼んでいたものが中心であったのが、この時期を境に新しい疑問詞how comeで用いられる「SV」と「単独(Sなし)」が大きく頻度を伸ばし、古い用法に取って代わる。

転換が起こる以前の1810年代から1910年代は、CEDでいえば4期から5期、OBCでは後半部分にあたり、イギリスでは特にS to不定詞構文が多く用いられた時期と重なる。図3を見る限り、19世紀のアメリカにおいてもやはりS to不定詞構文が用いられやすかったことがわかる。ただし、絶対的多数だったかという点、CEDやOBCほど顕著な差はなく、それ以外の述部要素をとる構文も比較的多く見つかっており、なかにはS(t) here構文がS to不定詞構文を僅かに上回る時期さえあった。また、S前置詞句構文が多いのもこの時期のアメリカ英語の特徴の一つである。全体的に見れば、19世紀のアメリカの日常的な言語使用においてHow come S構文の述部要素は比較的多样であったと言えそうである。

How come S構文の衰退はアメリカにおいても着実に進んでいった。19世紀初頭から19世紀半ばまでにその頻度は大幅に減少し、そうした傾向はその後加速した。OBCで確認する限り、How come S構文がイギリスでほぼ使用されなくなったのは1880-1913の時期であったが、COHAの資料もまたアメリカにおいて新旧用法の交代が起きたのは1920年代前後であったことを示している。古いHow come S構文が人々の間から姿を消したのは海を挟んでほぼ同時期だったといっていだろう。

図3から明らかなのは、旧来の用法が消滅したことに勢いを得たかのように、主語と定動詞を平叙文の語順でしたがえる疑問詞の用法が急速な勢いで頻度を伸ばし始めたことである。過去に遡れば、イギリスでは17世紀半ばから18世紀にかけてhowを文頭にとるV2が汎用性を失い、それと同時にHow come S構文が拡大していった。図3は新たな交代現象が世紀の変わり目のアメリカで起きたことを示している。1920年代以降、How come SV構文に加えて、How come?のように単独で用いる用法(「単独(Sなし)」)にもまとまった数の用例が得られた。こうした新しい用法はHow come SV構文の登場に伴って付随的に派生したとみて良いだろう。疑問詞には相手の発話を受けて省略的に用いられるものがあるが(When? Why? How?)、How come?もそうした用法に他ならない。本来は二語であったhowとcomeのまとまりが語彙的に結合し、疑問詞としての確固とした地位を得たがゆえに派生したものであり、CEDやOBCには見られなかった新しい表現形式である。

ところで、文法構造における表面的類似から、一般に形式主語を含む文が疑問詞how comeの

直接の起源と考えられやすいことは先に触れたとおりである。しかし、CEDやOBCのデータではそうした構文は少なく、むしろ頻繁に用いられたのはS to不定詞構文であった。また、アメリカでもit (to pass) (that) SV構文も含めてHow come S構文と呼んだ複数の構文がそれぞれ一定数用いられていたことがわかった。新しい言語表現が誕生するにはその母体となる前駆的な表現が日常語の中でかなり頻繁に用いられなければならないという前提に立つなら、今回使用した資料からは、形式主語を含む構文から新しい疑問詞の用法が生まれたと考える積極的な証拠は得られなかったといえる。

### 5.1 再分析

1920年代を境に新旧の構文が入れ替わっているのは、How come S構文と疑問詞how come構文が同様の意味機能を有していたことと無関係ではないだろう。V2に起源をもつ従来のcomeは、時制や人称を示す点で文法的自律性を維持していたわけだが、こうした表現が疑問詞の一部へと再分析される過程では具体的にどういった特徴の変化が起きたのだろうか。

How come S構文に起きた再分析は、図4に図式的に示した三つの変化によって特徴づけられる。つまり、1) howとcomeが結びついて語彙化する(how comeの語彙化)、2) 語形変化を失って単一の語形comeに固定する(comeへの固定化)、3) 述部要素の多様性を失いSVのみをとるようになる(述部要素の多様性消失)、という三つの個別の事象が新しい用法を形作った。ここでは、便宜的に1-3と番号を付したが、これは変化の順序を示すものではない。したがって、こうした変化が同時発生的に生じ、並行して進んだ可能性を排除するものではない。なお、前置詞や代名詞といった閉じた文法カテゴリーである機能語が、動詞や名詞など開いた文法カテゴリーであ



図4 How come S構文から疑問詞how comeへの再分析

る内容語に変わる文法変化も一般に語彙化と呼ぶが、ここでは語彙化のもう一つの意味、つまり複数の独立した語が緊密な結びつきを生じさせることによって一つの語を形成する史的变化の意味で用いる。

waistcoat や notebook のように、もとは独立の二つの語が合成して語彙化される際に、音韻上の縮約が起きやすいことはよく知られている。そうした音韻的まとまりが語彙化によって引き起こされる発音上の特徴なら、2) にあげた語形の固定化は語彙化によって引き起こされた文法上の特徴である。つまり、comes や came といった変化形を失うことは、動詞としての自律性を失うことであり、単一の語形への固定化は come が疑問詞の一部になることによって当然起こるであろう変化の一つだからである。

同様に、3) にあげた述部要素における多様性の消失もまた、come が動詞としての自律性を失ったことに起因する。to 不定詞句や場所を表す副詞句といった特定の述部要素は、come が動詞として機能している場合に限って用いられる。come が自律的な文法的役割を失うことはとりもなおさず、そうした述部要素の存在基盤が失われることに他ならない。動詞 come に付随する要素が文の中で居場所を失って姿を消していく代わりに、新たに登場したのが How come they knew? のような SV 構文である。how come が疑問詞へと再分析されたのであれば、文として成立するためには主語と動詞の組み合わせが必要になるのはいうまでもない。

語形や述部要素の種類は、どちらも書き言葉で確かめることができる。それに対して、1) にあげた語彙化は、音韻縮約という形では観察可能であるものの、書き言葉に反映されるには一定の時間を要する。bathroom が一語である一方で living room がいまだに二語とされるように、how come も間隔を置かず一息に発音され、how の二重母音が失われやすい傾向にあるものの、現代にいたるまで分かち書きされるのが通例である。

言語のなかで何が語とされるかは音韻的特徴に加えて意味的、文法的特徴に拠るように、語彙化に関しても、音韻的变化に加えて、それまで有していた意味や文法機能の消失や新たな機能の獲得といった内在的变化、さらには、そうした変化が文中の他の要素へ与える影響によって間接的に観察可能となる。我々が書き言葉の資料から読み取ることができるのはこうした間接的証拠であり、2) と3) にあげた come の固定化と述部要素の変化はまさに、how come の語彙化を証拠立てるそうした形式的現れといえるだろう。また再分析の要ともいえる語彙化の現象は単語同士の結びつきに対する話者の主観的把握に深く関わる現象でもある。come の自律性に起きた捉え方の変容が、一部の話者において come の固定化や述部要素の種類といった形式的特徴の変化として顕在化することによって、他の話者の意識における再考、再分析を促すとともに、使用範囲の拡大を押し進めたと考えられる。

## 5.2 comeの固定化

再分析で起きた形式的変化のうち、構文についてはこれまで見たとおりであるので、ここではもう一つの特徴である come の固定化について確認しておきたい。図5に示したのは、主節(How come S構文と疑問詞 how come 構文を含む)<sup>(8)</sup>における come の変化形の推移である。一見して明らかのように、古い構文が姿を消した時期を境として、用いられる動詞形も大きく変化している。1920年代以前、最も頻度が高いのは came であった。過去に起きた出来事について、その原因や理由をたずねるといふ構文の意味からいっても、過去形が用いられやすかったのはもっともといえる。comes と came がほぼ姿を消し、代わりに come が使われ始めたのは1920年代以降である。原理的にいえば、SV 構文への転換にみられる述部要素の多様性の消失と come への固定化は、別々の時期に起きてもおかしくないが、COHA の資料は二つが時を同じくして起きたことを示している。疑問詞 how come のヴァリエーションとしての How came SV? や How comes SV? といった表現は日の目を見ることがなかったようである。

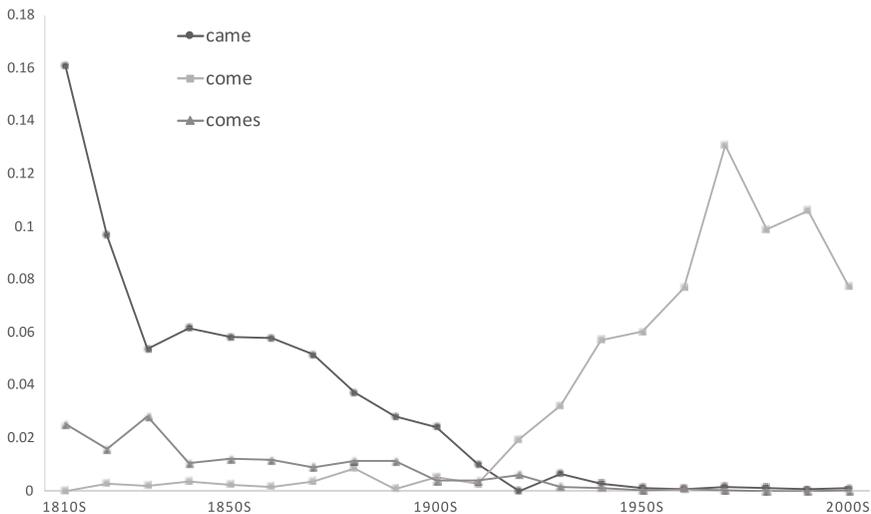


図5 COHAにおける come の変化形 (一万語あたりの頻度)

過去の事柄を表現するのに過去形を用いるのはごく自然であるとして、実は、1920年代以前の How come S 構文には、現在起きている事柄と強く関わる場合にも過去形が用いられる用例が多く見つかった。(11) にあげたのは、どれもなぜ相手が今そこにいるのかたずねる文であるが、(11a, b) では現在形が、(11c, d) では過去形が用いられている。いずれも、話題とされているのは、相手がこの場所にいるというまさに目の前の事実であることからすると、現在形の方が違和感が少ないかもしれない。ところが、こうした現在形の使用は全体から見ればむしろ少数派で、多くは過去形が用いられた。

(11)

- a. “(…) . Hih, hih, Monsieur, yes, life is sweet.” “And **how come** you to be out to-day?” “I strolled out for one walk, hih, hih, one walk for the health of my crutches and myself; (…)” (FIC 1857 Townsend, *The Brother Clerks*)
- b. **How come** you to be so far from home at this time of night? (FIC 1904 Flexner, *Mrs. Wiggs of the Cabbage Patch*)
- c. Mistress Alice: **How came** you here on such a busy day? Who will take care of the “Arquebus?”  
Anas Todkill: (pompously) The “Arquebus” must take care of itself. I have had important business. I’ve been rescuing the innocent, and exposing the guilty. (FIC 1848 Barnes, *The Forest Princess*)
- d. Green: Experience Green Fried potatoes! and the man has eaten pommes de terre la mitre-d’ hotel! Guardian spirit of Very’s, hear him not! But Count, **how came** you here eating these savage condiments?  
Count Stromboli: **I came** here partly out of curiosity, and partly because I consider it healthy to dine on common dishes once in a while. (FIC 1847 Paulding, *The Noble Exile*)

(11d) では、質問された人物が「好奇心に駆られてやって来た」と返答している。こうした用例では現在の状態に関する理由よりも、現在の場所に「来た」という過去の移動の意味が強く意識されるために、過去形が好まれるのかもしれない。同じく現在の状況を話題にする場面であるにもかかわらず、移動が起きた時点で焦点を当てた過去形と現在の状態の理由に焦点をあてた現在形が併存するのは興味深い。

ところで、came が多数派であった1920年以前に、現在形が用いられやすい構文があった。it (to pass) (that) SV 構文である。

(12)

- a. “But see here,” pursued the Rifleman, “**how comes** it you are in these woods at all? (…).” (FIC 1862 Ellis, *The Riflemen of the Miami*)
- b. But **how comes** it That you are here so far from the right way? (FIC 1898–1907 Hovey, *Launcelot and Guenevere*)

主語の it は that 以下の内容をうける形式主語である。したがって、it を主語とする come が移動や状態変化を表すことはない。こうした文で現在形が用いられやすかったのは、移動の意味が埒外にあり、代わりに、発話の時点での話者による問いかけが焦点化されたためだろう。came

が数の上で圧倒的優勢であった1920年代以前でも、こうした構文においては特徴的に現在形の comes が使用されていたわけである。

### 5.3 埋め込み文

ここまでの分析で考察の対象としたのは単文あるいは複文における主節である。なぜなら、How come S 構文は V2に起源を持つ表現であるとともに、V2は主節内で起きる文法現象だからである。では、従属節の一種である埋め込み文の場合はどうだろうか。(13) に示すとおり、そうした位置に現れる場合、疑問詞 how と動詞 come はもはや一続きではなく、間に主語が割って入る。一般に、主語、目的語、補語といった名詞句の位置に節が埋め込まれる場合、疑問詞を含んでも平叙文の語順をとるが、(13) もそうした規則に従っている。how と come が隣接したものを How come S 構文とする本稿の定義に従えば、こうした用例は How come S 構文とはいえない。

(13)

- a. Forgive me if I do not at present ask **how** it **comes** to pass. (FIC 1815 Dunlap, *False Shame*)
- b. But I want to know **how** it **came** to be made, in such hurry and secrecy. (FIC 1905 Moody, *The Great Divide*)

一方、新しい疑問詞 how come は一語であるため、埋め込み文においても主語に割り込まれることなく一つのまとまりとして用いられる。次の用例では、how come 以下は make out の目的語となる名詞節であるが、come は主語の直前に現れている。1884年の作品に見つかったこの用例は、用法の大きな転換が起きた1920年代に先立つこと数十年前のものであるが、ここでは how come は語彙化され、既に分離不可能な言語的単位へと姿を変えていると見ていいだろう。

(14) But I think I see you oncet or twicet lookin' at 'em and sort o' tryin' to make out **how come** they got into that shape. (FIC 1884 Cable, *Dr. Sevier*)

図6は、how come で始まるこうした埋め込み文の数を示している<sup>(9)</sup>。なお、ここでは以下のように主語と動詞を伴うことなく疑問詞のみが省略的に用いられるものも含めた。

(15) I said. I was his manager. That's **how come**. (FIC 1936 Mitchell, *Gone with the Wind*)

この図から、こうした埋め込み文が増え始めたのが、やはり主節において新旧構文の交代が起

きた1920年代前後であることがわかる。図3と図6を比較してわかるのは、主節において、how come のまとまりが疑問詞として再分析されることによって、新たに主語と定動詞を従えて用いられるようになったのと同じ時期に、埋め込み文においても一般的な平叙文の語順に従わない疑問詞 how come の用法が使用されるようになったことである。

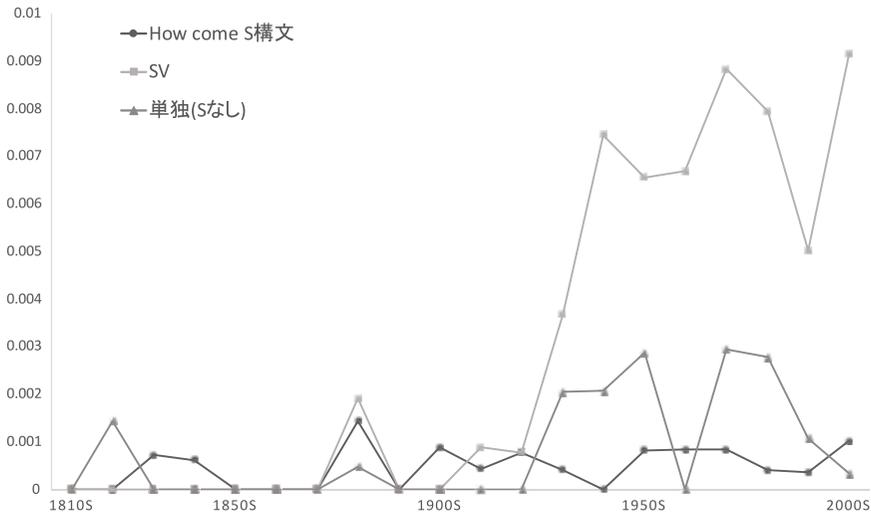


図6 COHAにおける埋め込み文(一万語あたりの頻度)

実は、How come S 構文に起きた再分析について考えるうえで、埋め込み文は大変貴重である。書かれた資料をもとにして分析を行う限り、how come が一つの語を構成するか否かの判断は一筋縄ではいかないのは既に述べた通りである。録音資料であれば、音韻結合が起きているかどうかを参考にすることもできようが、書かれた資料ではそうはいかない。そこで、本稿がそうであるように、分析する側としては、come の固定化に着目したり、語彙化が文の他の要素にもたらした変化としての述部要素の多様性消失に注目するといったように、語彙化が引き起こす種々の現象から得られた証拠を通して間接的に語彙化を確認することになる。というのも、主節では How come S 構文であれ疑問詞 how come 構文であれ、how と come が隣り合わせるため(だからこそ再分析が起きたともいえるのだが)、それが一般的な語順の規則によるものか、あるいは、話者の意識の中で既に語彙化が進行しているのか判断するすべがないためである。その点、埋め込み文は我々に語彙化の証拠を直接示してくれる。従来の語順に反して how come というまとまりが維持されたのは、まさに語彙化が完了していたためであり、話し手の意識の中では既に一つの語として確立していたためである。

ところで、COHA に見つかった埋め込み文のなかには、圧倒的多数を占める SV および単独(Sなし)に混じって How come S 構文も存在していた(図6)。(16)はそうした用例であるが、asked や know の目的語となる名詞節として、how come 以下が主節の疑問文と同じ語順で用い

られている。こうした用例は全体で35件得られたが、そのうち12件が came、1件が comes をとる。変化形が用いられる点においても How come S 構文の特徴を示すこうした用例は、一つを除いてすべて1920年代以前の資料から得られたものである。

(16)

- a. I saluted them on coming up, and asked Will **how came** he there. (FIC 1856 Stowe, *Dred: A Tale of the Great Dismal Swamp*)  
(cf. I saluted them on coming up, and asked Will **how** he **came** there.)
- b. I wish to know **how comes** it that you had in your possession private correspondence addressed to me? (FIC 1906 Klein, *The Lion and the Mouse*)  
(cf. I wish to know **how** it **comes** that you had in your possession private correspondence addressed to me?)

埋め込み文の位置に現れているにもかかわらず、how と come がひとまとまりで用いられる点においては、語彙化の可能性も完全に否定できない。しかし、こうした用法はおそらくは方言的用法の一つであると思われる。なぜなら、ask、wonder、know といった動詞の目的語の位置に現れる間接疑問文では、埋め込み文が平叙文の語順をとるのが一般的であるが、アメリカの非標準変種では、I wonder does he like me? のように疑問文の語順で用いられる場合があるからである (Fasold 1981, Green 2002)。この見方が正しければ、How come S 構文が間接疑問文として用いられる場合、標準的英語変種では (13) の語順が用いられたのに対して、非標準的英語変種では (16) の語順が用いられることがあったといえる。一部の方言では、主節であれ、埋め込み文であれ、how come が常にひとまとまりで用いられたことは、こうした変種では特に how come の語彙化が生じる環境が整っていたとも言えそうである。方言と疑問詞 how come の関係については、How come S 構文の移り変わりを明らかにするという本稿の主旨から外れるため立ち入らないが、稿を改めて検討する必要があるだろう。

## 6. おわりに

PPC、CED、OBC では疑問詞 how come の用例がほとんど見つからなかったことから (金原 2019)、本稿ではアメリカ英語コーパスである COHA を用いて、この新しい疑問詞がいつ、どのように誕生したのか調査した。また、再分析に至るまでに How come S 構文がどのような使われ方をしていたのかより詳しく知るため、構文を述部要素の種類によって分類し、イギリスとアメリカおける変化を観察した。

その結果、イギリス英語に関しては、初期近代英語期にはそれほど多くなかった How come S

構文が次第に増加し、18世紀初期に頻度のピークを迎えたことを CED と OBC の二つのコーパスで確認した。構文の種類は様々であり、それぞれ移動、状態変化、理由といった意味を表したが、なかでも頻繁に用いられたのは主に状態変化と理由を表す S to 不定詞構文であった。CED と OBC のどちらの資料においてもその数の多さは群を抜いており、当時のイギリス英語における How come S 構文の代表的な用法と違って間違いない。

COHA の分析からは、アメリカにおいて、V2に由来する一種の倒置構文であった How come S 構文から新しい疑問詞へと用法の転換が起きたのが1920年代頃であることが明らかになった。再分析は、how come の語彙化、come への固定化、(How come SV? のみが許容されるようになるという) 述部要素の多様性の消失という三つの変化によって特徴づけられるが、COHA から得られたデータはこれらすべてが1920年前後の同じ時期に転換期を迎えたことを示していた。また、新しい用法がこの時期に広く一般化し始めたことは、埋め込み文における疑問詞 how come 構文の増加によっても確認された。

OEDにおける疑問詞 how come の初出が、アメリカの方言辞典 Dictionary of Americanisms (1848) であることからすれば、疑問詞 how come が一般化し始めたのが20世紀に入ってからであったことは、ある意味、意外であった。この方言辞典は、ロードアイランド州出身の Bartlett が、ニューヨーク州ユティカからオクラホマ州ヴィンセント湖までの船旅の途中、耳慣れない語彙を書き留めたことに端を発して、アメリカ西部および南部で使用される口語表現を網羅的に収集しようとした試みの成果である (Crowell 1972)。この疑問詞に関してはヴァージニアで使用という記載があるため、当時この新しい表現が南部特有の方言的言い回しであったことが推測される。他方で、アメリカ全土の書き手による作品を収めている COHA は、作家の出身地、あるいは出版場所といった地域別カテゴリーが設けられていないため、用法の地域差を見ることは困難であり、コーパスから容易に疑問詞 how come の使用地域を特定できないのは残念である。しかし、いずれにせよ、Bartlett が旅先でこの表現を耳にしてから、COHA に収められたアメリカ全土の書き手による作品群に現れるまでに、実に半世紀以上の歳月を要したことは間違いないようである。

最後に、How come S 構文の再分析は完結したわけではなく、現在もまだ進行中である。多くの英語母語話者にとって疑問詞 how come が why や where といった他の疑問詞と完全に同化するに至っていないことは、疑問文の語順をとる How come are they invisible? や How come did she raise their wages? といった文が非文と見做されやすいことから明らかである。しかし、あえて「多くの」という限定付きで述べたのは、こうした文がすでに一部の母語話者によって使用されているという報告があるためである。Radford (2018) は、インターネット上で見つかったそうした用例を報告するとともに、英語および言語学を専門とする話者を対象に実施した自身のアンケートについて述べている。それによれば、一部の回答者は、こうした疑問文は容認度が低いとしながらも、まったくの非文とはしなかったそうである。疑問文の語順が今後さらに一般化して現在よりも定着の度合いが進むのかどうか、今後も注視していく必要があるだろう。

## 注

- (1) 以下はCEDで見つかった構文の粗頻度である。なお、1期、2期の総語数には裁判記録と証人供述調書の語数は含まれていない。分析からこれらのデータを除いた理由については金原(2019: 84)を参照のこと。

	1(1560-1599)	2(1600-1639)	3(1640-1679)	4(1680-1719)	5(1720-1760)
総語数	128,130	148,150	246,560	295,760	222,740
Sのみ	0	0	1	3	1
S to不定詞	0	1	7	22	19
it (to pass)(that) SV	0	0	2	4	3
S分詞形	0	1	0	3	0
S形容詞	0	0	1	1	0
S前置詞句	1	2	4	5	5
S (t)here	0	0	1	2	3

- (2) <https://cqpwweb.lancs.ac.uk>で利用可能。CED以外にも、現代英語、歴史報道テキスト、ヨーロッパ議会パラレルコーパス (Europarl) など、多種多様なコーパスにアクセス可能である。
- (3) CEDのタグセット (CLAWS7) が採用する語彙動詞 (VV) の屈折形は次の通り。過去形 (VVD)、三人称単数現在形 (VVZ)、一人称、二人称単・複数現在、三人称複数現在形 (VV0)、過去分詞形 (VVN)、現在分詞形 (VVG)、連鎖動詞の現在分詞形 (VVGK; 'be going to'のgoing)、不定詞 (VVI)、連鎖動詞の過去分詞形 (VVNK; 'be bound to'のbound)。このうちV2に現れうる屈折形態はVVD、VVZ、VV0の三つである。comeに関してのみ、おそらくタグ付けのエラーと見られる理由によって、本来VV0と分類されるべき語がVVNとされていた。これは、二つが同形であることが原因と思われる。comeの過去分詞形はhowの後の位置では文法的に許容されないため、文中に完了の助動詞がないことを確認したうえで、タグ付けエラーと認定し、こうした用例も例外的に再分類しデータに含めた。なお、固有のタグが付されるbe, do, haveは一律今回のデータから外れる。
- (4) <http://www1.uni-giessen.de/oldbaileycorpus>で利用可能。最新版のOBC ver. 2.0ではコーパスサイズが大幅に拡大され、総語数は2,440万語にのぼる。しかし、1720年から1913年までの採録期間に変更がないこと、データ量に応じて手作業で行う作業も膨大になること、また、本稿の分析にあたってはOBC ver.1.0でも十分な用例数がすでに得られることから、あえて総語数の少ないOBC ver.1.0を利用した。なお、最新版ではアノテーションが一部修正されたが、本稿の分析に特に影響を与えるものではない。
- (5) CED同様、OBCはCLAWS7のタグセットを採用している。語彙動詞の屈折形は過去形 (VVD)、三人称単数現在形 (VVZ)、一人称、二人称単・複数現在、三人称複数現在形 (VV0)、過去分詞形 (VVN)、現在分詞形 (VVG)、連鎖動詞の現在分詞形 (VVGK)、不定詞 (VVI)、連鎖動詞の過去分詞形 (VVNK) に加えて、CEDでは使用されていなかった縮約形の屈折語尾 (VVX) がある。
- (6) 以下はOBCの粗頻度である。

	1720-1759	1760-1799	1800-1839	1840-1879	1880-1913
総語数	2,322,071	3,017,735	3,038,482	3,019,533	2,597,965
Sのみ	5	9	0	0	0
S to不定詞	452	554	175	49	0
it (to pass)(that) SV	16	20	4	2	0
S分詞形	14	7	1	0	0
S形容詞	1	1	0	0	0
S前置詞句	64	69	15	6	2
S (t)here	16	18	7	3	0

- (7) 以下はCOHAで見つかったHow come S構文および疑問詞how come構文の粗頻度である。

	総語数	Sのみ	S to不定詞	it (to pass)(that) SV	S 分詞形	S 形容詞	S 前置詞句	S (Q)here	SV	単独 (Sなし)
1810s	1,181,022	0	8	2	1	0	4	7	0	0
1820s	6,927,005	10	16	7	2	0	17	27	0	0
1830s	13,773,987	15	31	28	4	0	20	18	0	0
1840s	16,046,854	10	39	12	7	2	20	29	0	0
1850s	16,493,826	12	37	21	7	2	16	22	0	0
1860s	17,125,102	7	36	13	2	2	19	41	0	0
1870s	18,610,160	5	46	12	7	0	19	31	0	0
1880s	20,872,855	13	33	20	3	1	14	28	5	2
1890s	21,183,383	2	25	23	0	3	14	19	0	0
1900s	22,541,232	8	20	8	1	0	13	20	1	2
1910s	22,655,252	2	11	8	0	0	4	11	1	1
1920s	25,632,411	5	4	15	0	4	0	3	17	17
1930s	24,413,247	9	15	3	1	4	2	5	36	22
1940s	24,144,478	4	8	1	1	2	2	5	89	35
1950s	24,398,180	7	3	1	2	0	3	1	105	28
1960s	23,927,982	8	3	3	1	0	0	0	129	43
1970s	23,769,305	8	5	2	3	0	0	4	217	75
1980s	25,178,952	4	2	0	0	1	1	1	202	40
1990s	27,877,340	7	3	0	1	3	0	1	242	40
2000s	29,479,451	4	4	1	1	1	0	3	180	38

(8) 以下はCOHAにおけるHow come S構文とおよび疑問詞how come構文で用いられたcomeの変化形の粗頻度である。

	came	come	comes
1810s	19	0	3
1820s	67	2	11
1830s	74	3	39
1840s	99	6	17
1850s	96	4	20
1860s	99	3	20
1870s	96	7	17
1880s	78	18	24
1890s	60	2	24
1900s	55	12	9
1910s	23	6	9
1920s	0	50	16
1930s	16	79	4
1940s	7	138	3
1950s	3	147	1
1960s	2	184	2
1970s	4	311	1
1980s	3	249	0
1990s	2	296	0
2000s	3	228	1

(9) 以下は、埋め込み文におけるHow come S構文および疑問詞how come構文の粗頻度である。

	How come S構文	SV	単独 (Sなし)
1810s	0	0	0
1820s	0	0	1
1830s	1	0	0
1840s	1	0	0
1850s	0	0	0
1860s	0	0	0
1870s	0	0	0
1880s	3	4	1
1890s	0	0	0
1900s	2	0	0
1910s	1	2	0
1920s	2	2	0
1930s	1	9	5
1940s	0	18	5
1950s	2	16	7
1960s	2	16	0
1970s	2	21	7
1980s	1	20	7
1990s	1	14	3
2000s	3	27	1

使用コーパス

CED: 近代英語期口語コーパス 1560-1760

*A Corpus of English Dialogues 1560-1760*. (2006). Compiled under the supervision of Kytö, Merja and Culpeper, Jonathan.

([http://www.engelska.uu.se/Research/English\\_Language/Research\\_Areas/Electronic\\_Resource\\_Projects/A\\_Corpus\\_of\\_English\\_Dialogues](http://www.engelska.uu.se/Research/English_Language/Research_Areas/Electronic_Resource_Projects/A_Corpus_of_English_Dialogues) [最終アクセス2017. 7.21])

OBC: オンライン版オールドベイリーコーパス1720-1913

*Old Bailey Corpus. Spoken English in the 18th and 19th centuries*. (2012). Compiled by Huber, Magnus, Nissel, Magnus, Maiwald, Patrick, and Widlitzki, Bianca.

(<http://www1.uni-giessen.de/oldbaileycorpus> [最終アクセス2017. 7.21])

COHA: アメリカ英語史的コーパス 1810-2009

*The Corpus of Historical American English (COHA): 400 million words, 1810-2009*. (2010-). Compiled by Davies, Mark.

(<http://www.english-corpora.org/coha> [最終アクセス2017. 7.21])

参考文献

Bartlett, John R. (1848). *Dictionary of Americanisms*. New York: Bartlett and Welford.

Crowell, Michael G. (1972). John Russell Bartlett's Dictionary of Americanisms. *American Quarterly*, 24 (2): 228-242.

Fasold, Ralph W. (1981). The relation between Black and White speech in the South. *American Speech*, 56 (3): 163-189.

Fischer, Olga, Kemenade, Ans van, Koopman, Willem, and Wurff, Wim van der (2000). *The Syntax of Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Green, Lisa J. (2002). *African American English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Huber, Magnus (2007). The Old Bailey Proceedings, 1674-1834: Evaluating and annotating a corpus of 18th- and 19th-century spoken English. In Anneli Meurman-Solin and Arja Nurmi (eds.), *Annotating Variation and Change (Studies in Variation, Contacts and Change in English 1)*. Helsinki: VARIENG. <http://www.helsinki.fi/varieng/journal/volumes/01/huber/>.

金原いれいね (2017)「コーパスを利用した現代英語における how COME S倒置文と疑問詞 how come 構文の分析」*釧路公立大学紀要『人文・自然科学研究』*第29号31-57.

金原いれいね (2019)「How VS動詞第二位文と How come S構文の発達 (1500-1914)」*釧路公立大学紀要『人文・自然科学研究』*第31号71-96.

Los, Bettelou (1998). The rise of the to-infinitive as verb complement. *English Language and Linguistics*, 2: 1-36.

Manabe, Kazumi (1989). *The Syntactic and Stylistic Development of the Infinitive in Middle English*. Fukuoka: Kyushu University Press.

Radford, Andrew (2018). *Colloquial English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Zwicky, Arnold M. and Zwicky, Ann D. (1971). How come and what for. *Working Papers in Linguistics*, 8: 173-185. Ohio: Ohio State University.

